



hina no marebito のまれびと

東京都北区立飛鳥中学校で3年間、PTA会長を務めた後も「地域の子供は宝」の信念のもと、やんちゃな生徒達に声をかけ続けた原和夫は9年前に養護教諭から相談を受けた。「教室に戻れない生徒が多すぎて保健室のキャパを超えています。原さんに言うのはお門違いですが一緒に考え行動してくれる人がいないとパンクします」と。原は「やんちゃの面倒は見るけど、保健室待機の生徒までは無理だよ」と答えたが、養護教諭の困った顔が目につかび専門書を読んで準備した。

新年度、養護教諭は他校へ異動となるが、荒川区教委で実績を挙げた鈴木明雄(現・麗澤大学大学院准教授)が校長に就任、「とにかく協

## 不登校ゼロの秘訣

殿上湯第4代店主・保護司  
北区教委スーパーバイザー  
原和夫氏

(73)



力します。不登校と保健室待機の生徒の受け皿を準備してください。私が全責任を負いますから」と。その後、原は区教委からスーパーバイザーに委嘱され、「ひまわり教室」運営の肚を固める。養護教諭、スクールカウンセラー、学生ボランティアとともにいじめや心の負担等で不登校、保健室待機の生徒宅を一軒一軒訪問し、どんな状況なら中学校へ来られるか聴いて、登校時間等の要望を容れた。やんちゃには「絶対に威圧するなよ」と言っ

て聞かせた。不登校を含む十数名いたひまわり教室も一時全員が普通学級に戻った。

その年の修学旅行にひまわり教室から男子1名、女子2名が参加することになり、原に引率を要請、やんちゃな生徒も託された。初日の深夜、奈良でAが警察に補導され、原が引き取り「今晚は私が責任を持って一緒に寝ます」と約束。「翌朝、学校一の暴れん坊と元不登校の生徒と一緒に寝ていて微笑ま

しかった」。それも束の間、「問題を起こしたら東京へ帰す」と言われていたAと一緒に近鉄奈良駅から始発電車に乗車。JR京都駅ではAの母親が悔し涙をいっぱい溜めて立っていた。原は母子の肩をポンと叩き奈良へ戻る。帰京後も原はA母子を気にかけて。「子供には声をかけ続けることが大事。説教はいらない。本人も自分が悪いと重々承知している」。そして「お母さんをひとりぼっちにさせてはいけない。時間の許す限り話を聴いた」と。

3年後、Aは晴れて高校を卒業し、原と鈴木のところへ一番に報告。現在、駒込で飲食店の店長をしているAが爽やかな笑顔で迎えてくれた。「原さんには僕もですが、母親が凄くお世話になりました」を原に伝えると、

「僕ももらい乳で生き延び、3歳の時は火事で知らない人が助けてくれた。助け合うのは当たり前ですよ。今日も原を頼る携帯電話がブーブー鳴っている」

〈文中敬称略〉